

『平家物語』における引用歌の構造

——地の文を中心とする考察

黒原理恵

一、はじめに

引用歌が対話及び消息文において成長した、^(注1)ということは既によく知られているところであり、『平家物語』でも会話文においては他の物語と同様に叙情的機能を果たしている。例えば、

かしがまし野もせにすだく虫のねや我だに物をいはでこそ
思へ
(新撰朗詠集・秋)

薩摩守忠度は、年来ある宮腹の女房のもとへかよはれけるが、或時おはしたりけるに、其女房のもとへ、や(し)こと

なき女房まらうときた(し)て、やゝ久しう物語し給ふ。さよもはるかにふけゆくまでに、まらうとかへり給はず。忠度軒はにしばしやすらひて、扇をあらくつかはれければ、宮腹の女房、「野もせにすだく虫の音よ」と、ゆふにやさしう口ずさみ給へば、薩摩守やがて扇をつかひやみてかへられけり。
(富士川 上三六七頁)

平忠度が宮腹の女房のもとへ通っていたときのことである。いつものように夜半に女房の屋敷に向かったのだが、あいにく先客があり、そのことを女房が引用歌でさりげなく伝えたところである。これには後日談があり、忠度は女房に「かしがまし」(古歌第一句)すなわち、「うるさい」と言われたので、あき

らめて帰ったのだと話している。しかし、忠度は女房の真意が下の句の「我だに物をいはでこそ思へ」にあると知っていて、興したのである。このように会話文の引用歌は非常に機知に富んでいる。

一方、地の文の引用歌は、これまで引用歌の研究が最も進んでいる『源氏物語』においても、その美的効果、すなわち古歌が持つ叙情をどのぐらい地の文に反映しているかについては言われてきたが、古歌が文章中でどのような位置にあり、どのような働きをしているかについては、まだされていなかった。そこで、地の文における引用歌を文章構造のどの位置にあるかによって分類すると、次のようになった。

- | | |
|---------------|--------------|
| 1. 主格：一二例、 | 2. 述格：一例、 |
| 3. 連体修飾格：三〇例、 | 4. 連用修飾格：五〇例 |
- (計九三例)

本稿では紙面の都合があるので、特に地の文の連体修飾格と連用修飾格の用例を中心に、述べることにする。

また、取り上げる引用歌は、漢詩・今様・散文中の一首の和歌を対象外とする。古歌には歌集と部立を、用例には章段名と『平家物語』の上巻・下巻の別とページを記す。テキストは、

日本古典文学大系『平家物語』を用いる。

二、地の文で主格をなす引用歌

地の文の引用歌で、主格になっているものは、調査の結果十二例あった。全体的に主格になる例は、古歌の一句か二句をとって成立している。引用歌には二重線を付し、主格は(主)、述格は(述)と記す。次は、文中に引用歌や歌語を疊み掛けた例である。

なげやなげ蓮が袖のきりぎりす過ぎゆく秋はげにぞかなし
き (後拾遺集・秋上・曾禰好忠)

其なかにも徳大寺の左大将實定の卿は、ふるき都の月を戀て、八月十日あまりに、福原よりそのほり給ふ。何事も皆かはりはてて、まれにのこる家は、門前草ふかくして、庭上露しげし。蓮が袖、浅茅が原、鳥のふしどと荒はてて、虫の声々うらみつゝ、黄菊紫蘭の野辺とぞなりにける。

(月見 上三三八頁)
……(二)

福原へ遷都が決まった年の秋のことである。徳大寺の左大将
実定は旧都を恋しがり京へ帰り上った。そこには以前の面影は
なく、家々は荒れ放題となっていた。古歌の第二句の「蓬が袖」
が主格となり、述格の「荒はてて」と照応している。

ところで、「蓬が袖」に関する論考がある。

歌ことばの問題が端的に語られている説話としてよく取り
上げられるのが、『袋草紙』に伝えられる藤原長能が曾禰
好忠の詠作の用語を批判した話であろう。

曾禰好忠の三百六十首和歌に云はく、

鳴けや鳴け蓬が袖のきりぎりす過ぎ行く秋はげにぞ悲

しき

長能云はく、「狂惑の奴なり。蓬が袖と云ふ事やはある」
と云々。

異端の歌人とされる好忠の面目躍如たる説話というところ
だが、(中略)この歌(筆者注一なげやなげの歌のこと)は好
忠や長能の時代から比較的近い『後拾遺集』に既に取めら
れている。当時の状況からすれば奇抜ともいえる表現を許
容した撰者藤原通俊の歌ことばに対する姿勢もあろうが、
「蓬が袖」はかなり早くから歌ことばとして認められたと

いうことになる。

点線部から、「蓬が袖」が既に後撰集の時代から歌ことばと
して認識され、世間でも曾禰好忠の用語として認められていた
のだということが分かる。しかし、今問題にしている箇所が歌
語か引用歌かということが問題となろう。そこで再び同じ論文
から、

好忠の「鳴けや鳴け」の歌は、『後六六撰』や『古来風体
抄』にも取められ、『西行上人談抄』にも、「古今の外にも
よき歌ども少々ありとて」として挙げられた歌の中に入っ
ている。『平家物語』五・「月見」に、福原遷都後荒廃し
た都のさまが語られる中にも、「蓬が袖」が見られる。(中
略)

『宴曲』「夕」も、引歌として見える。

草の戸さしの明け暮れは 袖も干しあへぬ露の間に

声弱りゆくふるさとの 蓬が袖のきりぎりす

右のように「蓬が袖」の用例は多い。さて、引用歌の認定の
問題だが、好忠のように、その歌ことばを初めて使った人が特

定できる場合、また作者が分からない場合でも、古歌が八代集のレベルであるときは、引用歌として認定してもよいと思う。

ゆえに、ここでは「蓬が袖」を引用歌とし、古歌は曾禰好忠の「なげやなげ」の歌であると考える。

ところで、文中で主格になっている引用歌とそれに照応する述格を二組持つ例がある。

秋はなほゆふまぐれこそたゞならねをぎのうはかせ

はぎのしたつゆ (和漢朗詠集上・秋・義孝少将)

さる程に、^(主)萩のうは風もやうく^(主)身にしみ、^(主)萩のした露も

いよ／＼しげく、うらむる虫の声々に、稲葉うちそよぎ、

「木の葉かつちるけしき」物おもはざらんだにも、ふけゆ

く秋の旅の空はかなしかるべし。まして平家の人々の心の

うち、さこそはおはしけめとをしはかられて哀也。

(藤戸 下二九二頁)

……(三)

平家の都落から一年余りが過ぎた。今は四国の地を保持するのみである。秋になり、都では三種の神器なして新しい天皇の即位式が行なわれたところである。

ここでは、古歌の第四句と第五句の「萩のうは風」(主)と「萩のした露」(主)が二句とも主格となり、それぞれが述格と照応している。これら是对句である。一方では自然を表現しながら、他方では平家の落人の深い喪失感を表している。

引用歌を主格に用いるとき、人の心情を短いことば、すなわち、古歌の一句で表現し文章を凝縮する効果がある。それは、引用歌によって文章(段落)を引き締まらせている、という意味である。このとき引用歌は一つの段落の主題にもなりうる。

三、地の文で述格をなす引用歌

地の文で述格になっているものは、次の一例のみである。

琴の音に峰の松風かよふなりいづれのをよりしらべそめけん
(拾遺集・雑上・斎宮女御)

亀山のあたりちかく、松の一むら^原ある方に、かすかに琴そきこえける。峯の嵐か、松風か、たづぬる人のことの音か、おぼつかなくは^原おもへども、駒をはやめて行程に片折戸したる内に、琴をそひきすまされたる。ひかへて是をきけ

れば、すこし「も」まがふべうもなき小督殿の爪音なり。

(小督 上三九七頁)

……(四)

昔、高倉天皇が葵前という女性を愛することがあった。しかし、その仲は引き裂かれ、葵前も郷里で亡くなってしまった。その後、あまりに嘆く天皇を見兼ねた側近が、小督という女性を向かわせたが、小督は清盛にとつて都合の悪い人物だったため、やはり引き離されることとなったのである。

「ここでは、古歌の第一句と二句と三句を用いて連用修飾格になり、被修飾格の「おぼつかなくはおもへども」にかかっている。この連用修飾格には特徴があるので詳しく見てみたい。

1. 琴の音に峰の松風かよふなり (古歌)

2. 峯の嵐か松風かたづぬる人のことの音か (引用歌)

古歌と引用歌は語順が異なっている。ここで、引用歌の「たづぬる人」(探している人物)は小督であり、彼女が弾く琴の音は読者にとつても最大の関心事である。それゆえ、「ことこの音」は最後に置かれるのである。このように、古歌と語順を異に

することによって、より文章に融合した修飾・被修飾の関係を作り出しているのであろう。

また、係助詞の「か」を用いて、「峯のあらしか」「松風か」「ことこの音か」と疑問の意味と軽快さ(リズム感)を付加していることも注目すべき点である。

四、地の文で連体修飾格をなす引用歌

地の文の引用歌で連体修飾格になっているものは、三〇例ある。以下、連体修飾格は(体)、被修飾格は(被)と記す。

次のように有名な古歌を用いた例がある。

1. ひとのおやのころはやみにあらねどもこをおもふみちに
まどひぬるかな (後撰集・雑一・兼輔)

「是みよ有王、この子が文の書やうのはかなさよ。をのれを供にて、いそぎのぼれと書たる事こそうらめしけれ。心にまかせたる俊寛が身ならば、何とてか三とせの春秋をば送るべき。今年は十二になるとこそ思ふに、是程はかなくては、人にもみえ、官仕をもして、身をもたすくべきか」

とて泣れけるにぞ、人の親の心は闇にあらね共、子をおもふ道にまよふ程(ほど)もしられける。(僧都死去 上二三八頁) …… (五)

引用した部分は俊寛の発言である。娘が有王に託した手紙を読み、親心を切々と語る場面である。引用歌の「ひとのおやの」は、俊寛の娘への想いを批評し、場面をまとめる役割を果たしている。

ここでは、古歌のほぼ一首が連体修飾格となり、被修飾格の「程」にかかっている。また、これと同様の古歌を持つ例がある。

同七月廿八日、小松殿出家し給ぬ。(中略)「入道相國のさしもよこ紙をやられつるも、この人のなをしなためられつればこそ、世もおだしかりつれ。此後天下にいかなる事か出こむずらむ」とて、京中の上下歎きあへり。前右大将宗盛卿のかた様の人は、「世は只今大将殿へまいりなんず」とぞ悦ける。人の親の子をおもふならひはをろかななるが、先立だにもかなしきぞかし。(医師問答 上二四五頁) …… (六)

古歌「ひとのおやの」は、『源氏物語』には二十三回も引用

されている。しかしその引き方は、『平家物語』とは異なる。

例えば、桐壺の巻の「闇にくれてふし沈みたまへるほどに」(新潮古典集成一卷一〇頁)や、須磨の巻の「なかなかの道のまどはれぬにやあらむ」(同書二巻一三二頁)や、薄雲の巻の「よそのものに思ひやらむほどの心の闇おしはかりたまふに」(同書三巻一五五頁)などである。

『源氏物語』には、古歌の「ひとのおやの」から「闇」や「道」ということばを引用した例が多い。このことから、古歌を引用する場合、作者の興味・関心によって採られる句が相違するこゝとが分かる。

また『平家物語』では、地の文では古歌の意味内容もさることながら、文章のリズムにも配慮したことが伺える。すなわち古歌を長く引用するときには、ゆったりとした雰囲気、短く引用するときには、軽快さをそれぞれ醸し出しているのである。さて、非常に技巧的な引用歌として次の例が挙げられよう。

むねはふじそではきよみがせきなれやけぶりもなみも
たたぬひぞなき (金葉集三・恋・平祐季)

女院、「是はいかにも返しあるべきぞ」とて、かたじけな

くも御すゝりめしよせて、身づから御返事あそばされけり。

たゞたのめほそ谷河のまろ木橋ふみかへしてはおちざ

らめやは

むねのうちのおもひはふじのけふりにあらはれ、袖のう

への涙はきよみが關の波なれや。みめはさいわいのほな

なれば、三位此女房をたまはして、たがひに心ざしあ

さからず。されば西海の旅の空、舟の中、波「の」上の

すまひまでもひき具して、ついにおなじみちへそおもむ

かれける。

(小宰相身投 下二三五頁)

……(七)

これは、越前の三位通盛とその北の方との恋愛の話である。女院が自ら筆をとり恋愛の仲介をしたことが語られている。

まず、古歌の第一句の「むねはふじ」を用いて、(体一)の「むねのうちのおもひはふじ」と言い換え、(被一)の「けふり」にかかっている。さらに、古歌の第二句の「そではきよみがせきなれや」を用いて、(体二)の「袖のうへの涙はきよみが関」と言い換え、(被二)の「波」にかかっている。

この例は古歌の上の句から下の句へと流れに沿った、連体修飾格の二段構成が出来上がっている。それは、連体修飾格を二

組もつという意味である。このような例は、平家のなかで他にはなく、作者による古歌の意識的な改変であり、引用歌を文章に取り入れるための工夫だと言えよう。

次のように、引用歌の音数に配慮した例がある。

山寺の入あひのかねのこゑごとにつふもくれぬときくぞかなしき
(拾遺集・哀傷・よみ人しらず)

文治元年長月の末に、彼寂光院へいらせ給ふ。道すから四方の梢の色々なるを御覧じすぎさせ給ふ程に、山かげなればにや、日も既くれかゝりぬ。野寺の鐘の入あひの音すこく、わくる草葉の露しげみ、いとど御袖ぬれまさり、嵐はげしく木の葉みだりがはし。
(大原入 下四二七頁)

……(八)

建礼門院が人目を避けるため寂光院に移ったところである。そこで鐘の音を聞いている寂寥感をおほえるのであった。

古歌の第一句と二句を「野寺の鐘の入あひの」と言い換えて連体修飾格をなし、被修飾格の「音」にかかっている。これは古歌と語順が異なっている。

やまてらのーいりあひのーかねの (古歌)

のでらのーかねのーいりあひの (引用歌)

①の「やまてらの」は、引用歌では「のでらの」であり、少々ことばが異なるが、ここで重要なのは、②と③の語順が入れ替わっていることである。これは音数の問題である。すなわち本文は、(アラビア数字は便宜上付した)

のでら7のかね5の／＼いりあひ5の／＼おとす5こく

わくる7くさば5の／＼おとす5こく

いと7おんそで5ぬれまさり

あらし7はげしく9／＼このはみだりがはし

つまり、七音と五音の組み合わせを作るために古歌の語順を替えたのである。かりに古歌のまま引用したならば、「やまてらの／＼いりあひの／＼かねの」と歯切れの悪い文章になる。やは

り、ここは本文のようにして文章と調和をとるのがよい。

五、地の文で連用修飾格をなす引用歌

地の文で連用修飾格になつてゐる引用歌は、一〇八例中、五〇例と約半数を占めている。そこで、連用格の内部に着目し、次のように分類した。

- a. 単独の格からなる例(四〇例)
- b. 主格+述格(四例)
- c. 主格+目的格(一例)
- d. 目的格+述格(二例)
- e. 主格+述格+目的格(三例)

では、分類aから見ることにする。連用修飾格は(用)、被修飾格は(被)と記す。

五―a、単独の格からなる例

阿耨多羅三藐三菩提のほとけたち我が立つ袖に冥加有らせ給へ (新古今集・釈教・伝教大師)

さればにや、さしもや（一）ことなかりつる天台の佛法も、
治承の今に及で、亡はてぬるにや。心ある人嘆かなしま
ずと云事なし。離山しける僧の坊の柱に、歌をそ一首書
たりける。

いのりこし我たつ袖の引かへて人なきみねとなりや
はてなむ

是は傳教大師當山草創の昔、阿耨多羅三藐三菩提の佛た
ち（二）にいのり申されける事をおもひ出て、誦たりけるにや。
いとやさしうぞ聞えし。（山門滅亡 上一九七頁）

……（九）

古歌の第一句、第二句、第三句の「阿耨多羅三藐三菩提のほ
とけたち」が「に」によって連用修飾格となり、被修飾格の「い
のり申されける」にかかっている。この部分は言わば呼格であ
る。新古今集の釈教からの引用であるが、梵語の例は他にはな
く、これ一例のみで異色である。

五―b、（主格+述格）からなる例

以下、主格は（主）、述格は（述）、目的格は（目）と記す。

とのもりのとものみやつこ心あらばこの春ばかりあさぎよ
めすな
（拾遺集・雑春・源公忠）

去る承安の比おひ、御在位のはじめつた、御年十歳はか
りにもならせ給ひけん、あまりに紅葉をあひせさせ給ひて、
北の陣に小山をつかせ、はじ・かへでの色うつくしうもみ
ちたるをうへさせて、紅葉の山となづけて、終日に観覧あ
るに、なをあきだらはせ給はず。しかるをある夜、野分は
したなうふひて、紅葉みな吹ちらし、落葉頗る狼籍なり。
殿守のとものみやつこ 朝ぎよめすとて、是をことごとく
はきすてて（三）げり。（紅葉 上三八九頁）

……（一〇）

高台上皇の大切な紅葉を、心ない庭番が全部掃き清めてしま
うということがあった。にもかかわらず、上皇は白楽天の「林
間煖酒燒紅葉」という詩を口ずさんでお許しになったのである。

古歌の第一句と二句と五句の組み合わせである「とのもりの
とものみやつこあさぎよめす」が「とて」によって連用修飾
格となり、被修飾格の「はきすてて（三）げり」にかかっている。

また、引用歌の内部では、「殿守のとものみやつこ」が主格
になり、「朝ぎよめす」が述格になって照応している。

五一c、(主格十目的格) からなる例

次は、助詞を特徴的に用いた例である。

よのなかをなにしたとへんあさほらけこぎゆくふねのあと
のしらなみ
(拾遺集・哀傷・沙弥満誓)

「さていかにをの、俊寛をば遂に捨はて給ふか。是程
とこそおもはざりつれ。日比の情も今は何ならず。たと理
をまげてのせ給へ。せめては九国の地まで」とくどかれけ
れ共、都の御使「いかにもかなひ候まじ」とて、取つき給
へる手を引のけて、船をばつるに漕出す。僧都せん方なさ
に、渚にあまりたふれふし、おさなき者のめのとや母
な(こ)どをしたふやうに、足ずりをして、「是のせてゆけ、
ぐしてゆけ」とおめきさけべ共、漕行船の習にて、跡は
しら浪ばかり也。

(足摺 上二二六頁)
……………(一一一)

鹿が谷事件で遠島となった成経たちが、ついに都へ帰るとき
が来た。が、赦し文には俊寛の名前だけ書かれておらず、諦め
きれない俊寛が喚びたり、船に取り付いたり騒ぎになった。

ここでは、古歌第五句の「あとのしらなみ」が連用修飾格と
なっている。これに照応する被修飾格はないが、「跡はしら浪
ばかり也」の「也」は、「跡はしら浪」を補っているという意
味で、補語格ともいえよう。

ところで、古歌は「あとのしらなみ」であり、引用歌の
方は「あと^はしらなみ」で助詞が異なる。そこで、「の」と
「は」の機能の違いについて考えてみる。

漕ぎ行く船の
あとのしらなみ(古歌)
あとはしらなみ(引用歌)

点線部に注目すると、古歌は格助詞「の」によって、「あと」と
「しらなみ」との間に修飾関係ができる。その結果「漕ぎ行
く船」も「あと」も両方とも「しらなみ」にかかっている。

一方、引用歌は係助詞「は」のために、「漕ぎ行く船のあと」
で一旦意味が切れ、「しらなみ」にはかからない。それゆえ、
引用歌の方が「しらなみ」を強調している。

引用歌の特徴は、言うまでもなく「表現の二重性」である。
それは、和歌の持つ叙情を文章に取り込み、物語の世界と重ね
合わせるという意味である。ここから、「しらなみ」と「俊寛
」がともに「跡に残された」という点で重なり、離島に一人取

り残された俊寛への作者の同情とも読みとれる。

五―d、(目的格十述格) からなる例

唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをし
ぞ思ふ
(古今集・鷗旅・在原業平朝臣)

逢坂山をうちこえて、勢多の唐橋駒もとどろにふみならし、
ひばりあがれる野路のさと、志賀の浦浪春かけて、霞にく
もる鏡山、比良の高根を北にして、伊吹の嶺も近づきぬ。
心をとむとしなければ、あれて中々やさしきは、不破の
關屋の板びさし、いかに鳴海の塩ひがた、涙に袖はしほれ
つゝ、彼在原のなにかしの、唐衣 きつゝなれにしとなが
めけん、三河の國八橋にもなりぬれば、蛛手に物をと哀也。

(海道下 下二五八頁)

…… (一一二)

古歌の第一句と二句の「唐衣きつつなれにし」が「と」によ
って連用修飾格となり、被修飾格の「ながめけん」にかかつて
いる。さらにもう一例、

はなちるといとひしものを夏衣たつやおそきと風をまつか
な
(拾遺集・夏・盛明のみこ)

いとまをこふ共、よもゆるさじとて、父にも母にもしらせ
ず、もろこし船のともつなは、卯月さ月にとくなれば、
夏衣 たつを遅くや思けむ、やよひの末に都を出て、多
くの浪路を渡き過ぎ、薩摩鴻へぞ下りける。

(有王 上三三三頁)

…… (一一三)

有王が俊寛の身を案じて、危険を冒して鬼界が島に向かった
春のことである。一刻も早く主人のもとに向かいたいという有
王のはやる気持ち引用歌により察せられる。

引用歌の内部は、「夏衣」が目的格、「たつ」が述格、「遅く」
は、その下に続く「思けむ」とともに被修飾格となっている。

もしかりに、古歌のまま、「夏衣たつやおそきと」と引いた
なら、第五句の「風をまつかな」が想起され、この場面の意図
が損なわれてしまったであろう。言い換えるなら、引用歌は「夏
衣たつを遅くや」とすることで、物語の内容を保ったのである。
それは、不要な意味を文章に取り入れられない工夫である。

五 i e、(主格十述格十目的格) からなる例

をしがなく、この山里のさがなればかなしかりける秋の夕ぐれ
(基俊集)

をし(主)か(述)なく(目) 此山里と詠じけん、嵯峨のあたりの秋の比、
さこそはあはれにもおぼえけめ。片折戸したる屋を見つ
ては、「此内にやおはすらん」と、ひかへくきつけられ共、
琴ひく所もなかりけり。御堂なしどへまいり給へること
もやと、釈迦堂をはじめて、堂々見まはれ共、小督殿に似
たる女房だに見え給はず。 (小督 上三九七頁)

…… (一四)

古歌の第一句と二句の「をしがなくこの山里」が「し」とに
よって連用修飾格となり、被修飾格の「詠じけん」にかかって
いる。この場面は、嵯峨の秋の状況を表すために、古歌の第一
句と第二句を引用したのであって、ここに技巧性はない。

六、おわりに

さて、これまでの調査で地の文の引用歌は、①助詞の用い方、

②倒置法、③句の長さを調節することに特徴があることが分か
った。特に連用修飾格と連体修飾格ではそれが顕著であった。
『平家物語』では、引用歌を修飾格として用いることに力を注
いだのだと言えよう。

今後は、連用修飾格のなかでも、単独の格からなる引用歌に
重点を絞って考察するとともに、新たに『源氏物語』の引用歌
の修飾格がどのような構造をもっているのかを検討してみたい。
なお、本稿は平成一一年度甲南女子大学大学院修士学位論文
の第一章を書き改めたものである。『平家物語』の諸本におけ
る引用歌の比較は、拙稿にまとめた。

(注)

1. 原田芳起氏「宇津保物語における引き歌―宇津保物語の
言語と文体(四)―(『平安文学研究』第三十七集、一九六
六年十一月、平安文学研究会)

2. 玉上琢彌氏「源氏物語の引き歌―その種々相―」(『国語
・国文』二七―八、同じく玉上氏「源氏物語の引き歌(そ
の二)―末摘花―」の巻頭―(『国語・国文』二七―一〇
など他にも論考は多い。

3. 小町谷照彦氏「歌ことばをめぐって」―「蓬が袖」考―
（『歌ことばの歴史』、一九九八年五月、笠間書院）
4. 山口博氏「源氏物語の引歌」一〇五頁（『源氏物語講座
第七卷』有精堂、一九八一年九月）、引用歌の用例を文
学的に（古歌の意味内容に着目して）分類したもので、
詳しい。

（参考文献）

- ・ 富倉徳次郎氏『平家物語全註釈』角川書店、一九六六年
五月〜一九六八年八月発行
- ・ 水原一氏校註 新潮日本古典集成『平家物語』、一九七
九年〜一九八一年発行
- ・ 伊井春樹氏『源氏物語引歌索引』笠間書院、一九七七年
九月三〇日発行